

國學院大學學術情報リポジトリ

談話室 宗教儀礼と社会礼儀

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ヘイヴンズ, ノルマン, Havens, Norman メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000181

宗教儀礼と社会礼儀

ヘイヴンズ・ノルマン

今年の國學院大學のPRポスターの一つで、女性が辞儀（拝礼）をする側面から撮影した写真がある。ポスター自体が非常に芸術的な描写だと思うが、最近、ポスターの狙い、つまり日本の社会における儀礼の位置づけや役割を考えさせられた。それは、神道のある施設に招待され、訪問する機会があったが、施設に到着したら、応接間に装束まといの若い神職さんに案内された。神職さんは部屋を出て数秒後また現れ、お絞りとお茶を運んでくださった。そのときであった。お絞りとお茶がのっているお盆をテーブルに置いて、お辞儀をして部屋を去ったが、全部はひとつの流れとしてなめらかな動きであった。流麗な行為でまるで茶道のような印象を受けた。

日本人にとって、そのような「儀礼的な行動」に対して驚くことがないかもしれないが、アメリカ育ちの私にとって、日本の礼儀に対する妙な感じがする。アメリカ人だけではなく、原理主義的なプロテスタント教会に育ったという要因が大きいかもしれない。ヨーロッパにおけるプロテスタント改革（宗教改革）のローマカトリック教会に対する批判の一つは、カトリックの「儀礼主義」（または「形式主義」）であった。改革者にとって、伝統や儀礼は「空の形式主義」に過ぎないで、人間とゴッド（神）とのつながりは儀礼によるではなく、介入するもののない「内なる」心と心のつながりであるべきだと主張した。自由な空気が漂っていた1960年代に育った私にとっても、儀礼は「虚礼」であって、ゴッド（神）が人間に求めるのは、そのような外的形式宗教ではなく、心の信仰であったと信じた。もちろん

ん、そのような反形式主義はキリスト教の改革者によって最初に現れたものではない。イエスが生まれる数百年前にイザヤやその他のユダヤ人に「預言者」が絶えず届けたメッセージは反儀礼的な「心の宗教」であった。イザヤが伝えた有名な神託のひとつによると、「あなたがたの多くのいけにえは、わたしに何になろう。」「わたしは、雄羊の全焼のいけにえや、肥えた家畜の脂肪に飽きた。雄牛、子羊、雄やぎの血も喜ばない……もう、むなしささげ物を携えて来るな。香の煙——それもわたしの忌みきらうもの。新月の祭りと安息日——会合の召集、不義と、きよめの集会、これにわたしは耐えられない……」とヤハウェ（ゴッド）が仰ったという。

しかしながら、上記の「聖なる」次元とは別に、「俗」の次元にも儀礼的行動の役割がある。儀礼は「社会の接着剤」だと言われて久しいが、冒頭で指摘したP Rポスターや神職の行為を合わせて考えると、人間にとっての儀礼の中心性が課題になる。例えば、1972年にハーバート・フィンガレットは哲学者ジョン・オースティンの「行為遂行文」なる概念を『論語』に転用して、『孔子——聖としての世俗者』を著したが、フィンガレットの新しい解釈によると、日常的な儀礼は原始時代からの外面的、形式的な、廃れるべき痕跡でもなく、あってもなくても社会の「接着剤」でもない。かえって、人間は儀礼によって社会を「する」というのである。言うまでもなく、このように「社会をする」ことを「礼」によって実現することは、容易くないとフィンガレットは強調する。けれども、我々人間は進化によって非常に儀礼的な動物になっていることも最近の研究は指摘する。その一つとして、オクスフォード大学のハーヴィ・ホワイトハウスが監督している「儀礼・共同体・対立プロジェクト」があるが、その趣旨は社会的複雑さの進化における儀礼の役割ということについての大がかりの研究である。

若者のとき私は宗教的な儀礼に反対だったが、今わかつているのは、私が反対していたのは儀礼そのものではなく、機械的で心がこもっていない儀礼であった。フィンガレットが孔子の態度を解釈するように、そのような儀礼はまさに「霊」がない「不毛で空虚な死したもの」になる。神職の長い祭祀の実習はそのような「空虚な」儀礼にならないためではないであろうか。また神職から学ぶことができるのは、「聖性」は宗教的な行いだけではなく、ごく日常的に「社会をする」礼儀にも内在される。

（宗教学）